

氏名	今 和俊
学位の種類	博士（デザイン学）
学位記番号	博甲第 9532 号
学位授与年月	令和 2 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	明治神宮外苑における競技場の軸線からみた配置計画 に関する研究

主査	筑波大学教授	博士（工学）	野中 勝利
副査	筑波大学准教授	博士（工学）	橋本 剛
副査	筑波大学准教授	博士（工学）	山田 協太
副査	筑波大学教授	博士（工学）	藤川 昌樹

論文の内容の要旨

今和俊氏の博士學位論文は、明治神宮外苑競技場（以下「外苑競技場」という。）および国立霞ヶ丘陸上競技場（以下「国立競技場」という。）の配置計画に関して、明治神宮外苑（以下「外苑」という。）の造営計画と外苑競技場および国立競技場の施設計画に関する同時代の資料、言説、図版等に基づいて分析することにより、明治・大正期から戦後にかけての外苑の施設計画における両競技場の軸線の扱われ方の変化について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

本論文は 5 章より構成されている。

第 1 章では、研究の背景、目的と意義、位置付け、方法について述べている。著者は、既往研究の調査を踏まえ、明治・大正期の都市計画において、軸線の正面に建造物を配置するバロック様式が一般的かつ重要な手法の一つであったことを指摘している。そして本研究では外苑競技場および国立競技場の配置計画の検証を課題として挙げ、明治・大正期から戦後にかけての外苑での競技場計画における軸線の扱われ方の変化について明らかにすることを目的としている。調査方法として外苑、外苑競技場および国立競技場に関する既往研究、同時代の資料、建築家らの言説、図版等を渉猟し、それらに関連付けながら分析することで軸線からみた競技場の配置計画について考察を行うこととしている。

第 2 章では青山練兵場の設立以前から外苑への変容過程における土地利用や構想・計画の実態と、この場所における明治天皇のゆかりについて整理している。著者は、外苑における明治天皇のゆかりは、青山練兵場の開設当初から継続的に行われていた観兵式と、明治天皇大葬儀式場として使用されたこととしている。そして日本大博覧会会場として構想された時の計画は軸線を用いたバロック様式であったことや、大葬儀式場は直線道路の先に葬場殿を配置する空間構成であったことを指摘し、明治期における青山練兵場を対象とした施設計画での軸線の扱われ方について明らかにしている。また明治神宮の創建を請願した渋沢栄一と阪谷芳郎、外苑に競技場の建設を提言した嘉納治五郎の思想的な背景を当時の世相と関連付けながら整理している。

第3章では、外苑の造営計画の変遷を整理するとともに、外苑競技場の配置計画における軸線の扱われ方について分析している。著者は、特に明治天皇のゆかりである観兵式と明治天皇大葬儀に着目し、観兵式の玉座の位置であったエノキが外苑の造営に際して最終的に「御観兵榎」として記念され、絵画館周辺の空間構成が大葬儀式場の空間構成を踏襲していることを明らかにしている。そして外苑競技場のトラック単軸が玉座（外苑競技場の貴賓席）と大葬儀式場の外廓総門（中央広場の梯子状の苑路の位置）を結ぶ軸線と一致するとともに、明治神宮野球場の本塁と二塁を結ぶ軸線上にも外廓総門が位置することを明らかにしている。著者は、大正期の外苑における競技場計画での軸線が他の主要な施設の軸線とともに大葬儀式場の空間構成と関連付けられて計画されており、重要な位置付けにあったと述べている。

第4章では、成立前史を含めた国立競技場の計画の変遷を整理し、国立競技場の配置計画における軸線の扱われ方について分析している。著者は、戦後のGHQによる接收期間中に中央広場の梯子上の苑路が消失し、外苑競技場のトラック単軸が持っていた象徴性や記念的性格の重要性は低下したと述べている。また検証の結果、国立競技場の方位を競技場として好都合とされる軸線の方位で計画することは可能であったが、その場合はメインスタンド側へのアクセスが悪くなることを指摘し、国立競技場の配置計画が主に競技場の機能的なデザインに基づいて決定されたことを明らかにしている。著者は、戦後に外苑の空間構成が変化するとともに大型スポーツ施設の設計に関する技術や知見が構築されていく過程で、国立競技場の軸線は外苑全体の空間構成や明治天皇のゆかりとは関係なく計画されたと述べている。

第5章では、著者は各章で得られた知見をまとめ、明治・大正期から戦後にかけての外苑の施設計画における競技場の軸線の扱われ方の変化について述べている。結論として、明治・大正期には外苑の持つ精神的な意味を表現する重要な位置付けにあった競技場の軸線が、戦後においてはその重要性が変化し、機能的なデザインを重視して競技場の軸線が計画されるようになったと述べている。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究はこれまで十分に検証されていなかった外苑競技場および国立競技場の配置計画について関連する同時代的資料を適切に渉猟しながら分析を行っており、調査方法に妥当性がある。そして外苑の競技場を例として取り上げ、近代の都市計画において重要な設計手法であった軸線の扱われ方が現代への過渡期においてどのように変化したのかを検証した点において、独自性と学術的意義がある。本論を構成する骨子は日本建築学会と芸術学研究の査読付き論文2編として採用されており、学術的価値も認められている。本研究で得られた有効な知見は、今後の近現代都市計画史に寄与する発展が期待できる。

令和2年1月24日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。